

禪宗の佛像に就て

伊 藤 古 鑑

一

禪の日本文化に影響した點は非常に多いので、これを各方面に互つて研究するといふことは、實に容易なことではあるまい。そこで、私は禪宗寺院の佛像に就て、少しく其の所見の一端を述べて見ようと思ふが、これも複雑多様で、とても纏つた研究を發表するといふところに至つてゐない。先づ禪宗寺院の本尊佛の種類に就ても一定してゐない。逸見梅榮博士が曹洞宗一萬四千餘ヶ寺の寺院に就て、宗務院へ申告された原簿から調査し、その結果を報告してゐるゝが、いま、その中の百已上の佛菩薩を舉ぐれば左の如し。

如來部	
釋迦如來	六三九三
藥師如來	一一一六
阿彌陀如來	九七九
大日如來	一三四

禪宗の佛像に就て

(一)

菩薩部	觀世音菩薩	三八一七
	地藏菩薩	一一一〇
	虛空藏菩薩	二二六

如來部に於ては、最も釋迦如來が多く、藥師、阿彌陀、大日の四佛が代表的の本尊佛である。これは日本の禪宗寺院は鎌倉時代に始まつたもので、それ已前に建てられた舊寺院では、主として藥師如來が本尊佛であり、また鎌倉時代已後に於ても、天台、眞言、淨土等の寺院で禪に改宗したものが少なくなかつたであらうが、その本尊佛などは、禪家がそのまゝ踏襲して安置してゐたもので、そこに大日如來や、阿彌陀如來の本尊佛も、今日、禪宗寺院に残つてゐるのであらう。

尙ほ、これには、いろいろの事情があつて、禪宗は、別に此の本尊佛でなくてはならぬといふ規定もないし、「何れの佛でも、自心佛だ」なんといふ考へ方であるから、本尊佛も種々雑多なものに分れたのであらう。

菩薩部では、觀世音菩薩が最も多く、地藏、虛空藏に續いて、文殊、彌勒、勢至、普賢の名も擧げられてゐる。また明王部では不動明王が四十二ヶ寺で、最も多く、愛染明王、青面金剛童子を本尊佛とする寺院もあるとのことである。また護法の天等部では毘沙門が二十一ヶ寺、それに續いて梵天、帝釋天、辨財天、托担尼天、大黒天などもあるが、これ等は少數で、殆んど語るに足らない

ものである。

かくの如く、曹洞宗の寺院に於ては、その本尊佛の種類がまち／＼に分れてゐるが、我が臨濟宗の寺院に於ても、殆んどこれと大差ない比率に依つて、分れてゐること、思ふが、要するに禪宗寺院の本尊佛は、先づ釋迦如來が第一位であり、觀世音菩薩が第二位に奉祀されてゐるといふことは事實であらう。

二

禪宗の本尊佛は、誰でも良いといふものゝ、その實は釋迦如來が中心である。しかし、この釋迦如來にも、いろ／＼の種類があるが、禪宗としては「拈華の釋迦像」が最も重んずべき佛像であらう。これは釋尊が靈山會上に於て、一枝の金波羅華を拈じ、大衆に揚眉瞬目して望まれた時、獨り摩訶迦葉尊者のみが破顔微笑して、釋尊より大法を付屬せられたといふ因縁から、禪宗の相承は始まり、拈華の釋迦像を重んずるといふことになつたのは勿論である。また「寶冠の釋迦像」といふて、頂きに寶冠を戴き、身に瓔珞を纏ひ、手に環釧を着けてゐる佛像で、これは『華嚴經』に出てゐる說で、佛成道後、最初の御說法のお姿といふのであるから、これも禪宗としては、佛自内證そのまゝを御說法になつてゐる寶冠の釋迦像として特に重んずる佛像といはねばならぬ。

これに就て、面山の『洞上伽藍諸堂安像記』には「佛殿三尊」といふて、釋迦像に「拈華釋迦」と

禪宗の佛像に就て

(三)

「天冠毗盧」との二種を挙げ、一は生身の釋迦であり、他は法身の釋迦なることを論じ、その脇士として、生身の釋迦には迦葉阿難の二比丘を安置し、法身の釋迦には文殊普賢の二菩薩を安置するやうに説いて、その理由を委しく説明してゐるが、尙ほ、その終りのところに、

記^{シテ}云ク、三尊安^{ズル}二兩様^ヲ者、由^ル上^ニ所^ノ舉^{グル}義^ニ也、然^{ルニ}而支那天童山ノ佛殿、安^ニ釋迦彌陀彌勒^ヲ、而^{シテ}額^ニ於三世如來ノ四字^ヲ也、日本永平^ノ傲^フ之^レニ、東山ノ泉涌寺^モ亦是^レナリ也、案^ニズルニ泉涌寺ノ殿堂色目^ハ開山^ノ所^述云ク、佛殿^ト者、安置^ス釋迦^{過去佛}彌陀^{現在佛}彌勒^{未來佛}三世之教主、以^テ爲^ス一寺崇仰之本尊^ト也、大唐諸寺普^ク皆如^シ此^ノ云々。

と記してある。故に、佛殿に「三世如來」を安置することは、支那天童山のみではなく、大唐諸寺一般に安置してゐたやうにも思はれる。しかし、瑩山禪師は永光佛殿に「釋迦、觀世音、虛空藏」を安置せられ、鎌倉建長寺佛殿には地藏尊を安置せられ、洛西臨川寺佛殿には彌勒尊を安置せられたといふので、決して一定してゐたものとは思はれないが、これは恐らく其の開山の信仰佛、因縁佛を奉祀せられたものであらう。一般としては、前にいふた如く、生身の釋迦なれば、迦葉、阿難を脇士に配し、合掌せる比丘像で、迦葉は老比丘の立像、阿難は端麗な若き比丘僧で立形である。また法身の釋迦なれば、文殊、普賢を脇士に配し、文殊は獅子に乗り、利劍を執り、普賢は白象に乗り、合掌してゐる姿である。

もちろん、生身の釋迦であれば、大法を迦葉、阿難と相承せられ、二人とも釋尊に隨侍した人であるから脇士として祀るのであらう。また、法身の釋迦なれば『華嚴經』に出てゐる説に依つて、文殊と普賢とを脇士として祀つたものと思ふ。文殊と云ひ、普賢と云ひ、いろいろの意味に於て説明せられてゐるが、いま清涼澄觀の説に依つて見ると、三種の相對に依つて説かれてゐる。第一を能信と所信との相對といひ、普賢は所信の法界たる如來藏となし、文殊は能信の心に配してゐる。第二を解と行との相對といひ、文殊を智解となし、普賢を行願としてゐるので、これは能く一般に知られてゐる通説であらう。第三を理と智との相對といひ、普賢は所證の眞理であり、文殊は眞證の眞智であるといふので、これに依つて、常に「普賢の身相は虚空の如し」と説かれ、「文殊は三世諸佛の母なり」と稱せられてゐる。要するに、この文殊と普賢との交渉を最も明細に説いたものは『華嚴經』であつて、この經の始終の所詮は、文殊と普賢とに依つて代表され、この二菩薩に依つて法身の如來を體現することを示したものと見て良からう。故に、見方に依つては、いろいろにも説かれる。初心、滿心の相對、信と證との相對、智と悲との相對とも見らるゝ。

釋迦像の脇士の話は、これで止めて、次に、この生身、法身の釋尊像以外に、禪宗では、誕生會に幼兒形の立像を安置し、成道會には出山の釋迦像を用ひ、涅槃會には涅槃の有様を描ける畫像を掛けて、法要を営むことになつてゐる。その中、禪宗として最も意義あるは成道會であつて、出山

の釋迦像は禪宗的のものと見ることが出来る。

三

禪宗寺院の本尊佛として、釋迦如來に次いで多く用ひられてゐるのは觀世音菩薩である。

この觀世音菩薩は、また支那禪宗の衆寮にも安置して本尊としたといふので、日本にも之れを倣つてゐる。古くは『備用清規』『勅修清規』にもあらはれ、日本の『瑩山清規』にも出てゐる。また天童山の衆寮額には、一は「妙嚴堂」といひ、一は「照心寮」といふたと傳へてゐる。前者は『首楞嚴經』に本據があり、後者は『寶藏論』の「古教照心」から取つたものであらう。

この衆寮は看讀の道場であつて、音聞が主であるから、觀世音菩薩を本尊にしたものであらうが禪宗に於て觀世音菩薩を用ゐるのは、『法華經』『首楞嚴經』の所説に依つたものであらう。

しかし、この觀世音菩薩には極めて種類が多い。先づ、これを思想的に考へて見ると、觀音の信仰は印度に於て盛んに行はれ、その經典としても甚だ少なくないのである。その中、最も根本的な思想は『法華經』と『無量壽經』と『華嚴經』との三經の思想であつて『法華經』の觀音は、觀音の心を説いて、衆生救済の慈悲心廣大なることを顯はし『無量壽經』の觀音は、觀音の相好を説いて、衆生の隨喜仰信する柔和忍辱なるお姿を顯はし『華嚴經』の觀音は、觀音の住處を説いて、樹木鬱蒼、谿谷清泉なる仙境を顯はして、各その特長を發揮してゐるやうに思ふが、これが根本的で

あつて、それから、いろ／＼の思想に分かれ、隋末に『十一面觀世音神咒經』や『不空羂索神咒經』の翻譯があつて、次第に密敎の傳來と共に、千手、如意輪、正、馬頭、准胝等の觀音念誦儀軌が多く翻譯せられ、そこに佛像といふものゝ考へ方が密敎的に向つて、複雑多岐になつてきたのであるが、いま、それ等密敎的の考へ方を述べるのが主ではないから、略しておく。

要するに、觀音の思想は、後には、いろ／＼の思想に變つてゆくが、矢張り禪宗では『法華經』を読むから、正觀音が主であるといつて良い。また『千手陀羅尼』を讀誦するといふ點からいへば千手觀音を主とするといつても良いが、しかし、何れにしても、自身即觀音を發得するのが禪思想であつて、『箇箇面前觀世音、人人一座補陀山』といふことを忘れてはならぬ。徒らに他にのみ觀音を求めて、自の觀音を失卻することがあつてはならぬといふものであらう。

四

禪宗の本尊佛に次いで、伽藍佛のことを一言述べておかう。先づ禪宗の伽藍の完備したものを七堂伽藍といふてゐる。すなはち、道忠禪師の『禪林象器箋』にも、

忠曰、法堂、佛殿、山門、厨庫、僧堂、浴室、西淨、爲七堂伽藍、未知何據、各有表相如圖。

厨庫 左手 浴室 左脚

禪宗の佛像に就て

禪宗の佛像に就て

(八)

法堂頭

佛殿心

山門陰

僧堂右手 西淨右脚

この七堂伽藍の中心となるものは法堂であつて、明眼の宗匠が大法を舉揚する殿堂であるから、本來は佛像を安置する必要はないが、それが後世になると、須彌壇の後方に張り出しを設けて、佛像を安置するやうになつた。或は佛殿と法堂とを兼ねたやうな事になつたが、法堂そのものは、中央に須彌壇を設け、四方から瞻禮することの出来るやうに造るのであるが、それが後には、いろいろの事情に依つて、須彌座の後に大板屏を設けたり、張り出しを造つて、佛像まで安置するやうになつたものであらう。

この法堂を除く他の六堂の伽藍には、みな別々の佛像を安置することになつてゐる。これは恐らく宋朝時代から始まつた制度であらうが、これに就て参考になるものは、面山和尚の『洞上伽藍諸堂安像記』と、慧璞和尚の『洞上伽藍雜記』である。また臨濟宗では、道忠禪師の『禪林象器箋』に於ける「殿堂門」「靈像門」等である。いま其中、面山和尚の説に依つて、伽藍諸堂の佛像を列記すると、

山門

羅

漢十六尊者
五百尊者

浴室

跋陀婆羅菩薩

厠室 烏瑟沙麼明王

庫堂 韋駄天

厨上 竈公

衆寮 觀音

僧堂 僧形文殊

經藏 傳大士

伽藍 大權 土地 鎮守

祖堂 達磨

佛殿 三尊

とを擧げ、更に附録として、荒神、深沙大將、大黒神、普菴、龍天白山考證記などのことが説かれてゐる。

また『禪林象器箋』には、詳細なる項目に依つて、その本據などを擧げて説明して居らるゝが、しかし、それが果して、禪宗の宗旨から、どういふやうに見らるゝものか。もとより禪宗的の佛像として見らるゝものは少なく、たゞ禪的に、伽藍に奉祀するといへば、それまでのもので、禪宗からいへば、施設教化門の立場で、佛像を安置し、陀羅尼を唱へ、有縁を教化したものだと思ふのであ

禪宗の佛像に就て

(九)

る。

五

今更に、前に擧げた伽藍の佛像に就て略述するならば、先づ山門とは、實は三門と書き、山門（寺院全體）のなかの一であつて、左中右の三門を並列して一門を作り、空無相無願の三解脱門を表示してゐるといはれてゐる。その三門の樓閣上に十六羅漢を安置してゐるが、中央は寶冠の釋迦、脇士に月蓋長者と善財童子とを祀り、その兩側に十六羅漢の像を列べるのである。また禪宗では「羅漢講式」といふて法要を勤めるのであるが、その本據は玄奘三藏翻譯の『大阿羅漢難陀密多羅所說法住記』に出てゐる。

尙ほ此の外に堅意菩薩の『入大乘論』上にも、寶頭盧、羅睺羅等の十六大聲聞のことが出てゐるが、その名は『法住記』とは一致してゐない。この『法住記』の説に依ると、佛滅後八百年頃、師子國勝軍王の都に難提密多羅（慶友）といふ大阿羅漢が示寂する時、多くの比丘が慟哭して、「正法を護持するものが絶ゆる」と歎息したので、こゝに難陀密多羅は「佛在世時代の十六大阿羅漢の因縁」を説き、正法は十六大羅漢の手に依つて護持せられてゐると教へたのが『法住記』の内容である。

また『彌勒下生經』にも、釋尊が迦葉に告げて、四大聲聞が我が法を護持するといふて、大迦葉、

君屠鉢歎、賓頭盧、羅云の四比丘を擧げてゐるが、その四人の中の賓頭盧と羅云は『法住記』の十六羅漢にも出てゐるから略して、大迦葉と君屠鉢歎とを十六羅漢に加へて十八羅漢となし、これが正法護持者だといふ説が唐代に起り、宋代に傳へられたと説いてゐる。しかし、この説は天台の荆溪大師や淨覺などが唱へたが、この外の十八羅漢説もある。

一、十六羅漢に賓頭盧と慶友（『法住記』作者）とを加ふ。

二、十六羅漢に慶友と禪月大師貫休（十六羅漢を感じて畫像を書きし人）を加ふ。

三、十六羅漢に達磨多羅（法救）と布袋和尚とを加ふ。

十六羅漢の畫像を書いた貫休は、定中に於て感見したといひ、その妙技は今も尙ほ喧傳されてゐる。その後、十六羅漢は脱俗的に書かれ、仙人的に取り扱はれ、虎や龍をも書き添へて、應化無方の神變を表現するやうになつたが、我が禪宗では正法護持者として三門の閣上に安置し、或は羅漢講式を勤修してゐる。

次に三默堂の一たる浴室には跋陀婆羅菩薩を安置してゐるが、これには出家形と在家形とある。

『大智度論』と『首楞嚴經』とに本據あり、『碧巖錄』にも「開士入浴」の因縁が出てゐる。

また厠室も三默堂の一である。西淨とも東司とも、また雪隠ともいふてゐるが、こゝには烏瑟沙變明王を祀つてゐる。本據は『首楞嚴經』にも出てゐるが、元來は密敎的のもので、火頭金剛とも

不淨金剛ともいひ、火光三昧に入つて、一切の穢惡を燒き盡すといふのである。

また僧堂は三默堂のなかで、最も大切なところで聖僧を祀るので聖僧堂ともいひ、僧堂、雲堂、選佛場の異名があるが、その祀るべき聖僧にも異説が多い。我が國では殆んど僧形の文殊で、袈裟を着け、手に定印を結んでゐる姿である。『禪林象器箋』にも、

大乘ノ寺へ、文殊^ヲ爲^ニ聖僧^ト、其ノ像ハ僧形^{ナリ}、不異^ニ聲聞衆^ニ矣、夫レ内^ニ證^シ大乘ノ法^ヲ、外^ニ現^ミ聲聞ノ形^ヲ、内外相兼^ス、方^ニ稱^ス圓備^ト。

といはれてゐる。その他、賓頭盧、橋陳如、大迦葉、須菩提等のなかの一體を聖僧とすることもあ
るが、それには、みな理由がある。第一の賓頭盧は、十六羅漢の始めで、現に世に在つて正法を護
持するといふ説であり、第二の橋陳如は僧寶の始めで、法臘の上位と見る説、第三の大迦葉は衆中
の上座で、大法繼承者と見る説、第四の須菩提は解空第一で、坐禪堂には理想の行者であると見る
説である。

六

次に庫裡に韋駄天を祀ることは、南山の道宣律師の感得せられた因縁で、この天像を厨房に祀れ
ば、食に不足しないといふことで、「食輪法輪、兩俱運轉、世事佛事、一等圓融」から來たことで
あらう。しかし、これには異説もあつて、實際のところは、不明といふより仕方がない。この韋駄

天には俗説もあつて、どこまで信じて良いか解らぬ。また大黒天を厨房に祀るが、これも俗説が多い。大黒に關する世間の學説も可成り多いやうに聞いてゐる。

また竈に荒神を祀るが、これは日本の火神で、佛説ではない。世に『荒神經』があるも、僞經で信するに足らぬ。「南方火德星君、火部星衆」といふが、これは支那の火神であらう。印度で十二天のなかの火天が火の神である。火天は密教に祀られ、火德とか荒神とかは禪院に祀られてゐるやうに思ふ。

伽藍の守護神には、大權修利菩薩を祀る。大唐阿育王山の護法神で、右手を額に加へ、遠望の勢ひを示してゐるが、これに就ては『禪林象器箋』にも説明してゐる。その他、土地神を土地堂に祀り、鎮守を鎮守堂に祀つて、その境内土地を守護し、火災盜難を鎮定し、諸堂伽藍を維持してゆかるゝ神を祀るのであるが、これも禪院獨特の説とは思はれない。

祖師堂には達磨、百丈、臨濟を祀るのが本義であり、開山堂には開山を祀り、經藏には傳大士とその二子の普建普成を祀る。傳大士は禪的奇行の多かつたことは良く知れてゐる。『善慧大士語錄』があり、禪語も多い。儒教道教に通じてゐるといふところより、その形像は「道冠儒履釋袈裟」で有名である。

また、この外に十六善神を祀つて、大般若轉讀をなし、觀音像を祀つて、觀音懺法を修すること

禪宗の佛像に就て

(一四)

がある。また一般には十三佛の信仰もあるが、これ等の事は、嘗て書いたこともあるから、こゝには略する。(昭和十五年九月十五日稿)